野田宇太郎 文学散歩 第13巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他,全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　13
東海文学散歩　　山道篇

昭和53年5月10日　　初版第1刷発行

著　者　　野田宇太郎
発行者　　佐藤　弘一
発行所　　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1978
0395-90113-7354　　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目次

中仙道

中津川　二
恵那山麓の中仙道　落合川ダムと葉山嘉樹　宿場道　川上の恵那社　夜烏高原と牧水

大井　二七
蜀山人の旅　牧水の歌と大井　恵那峡と白秋

太田　三九
美濃加茂市へ　坪内逍遙の故郷　虚空蔵堂附近　祐泉寺の庭　志賀重昂と「岐蘇遊園」　雨の日　青柳橋　日本ライン

犬山　七三
猿と桃太郎　「日本ラインの白い兜」　丈草の句碑

明治村　八五
入鹿池と『日本書紀』の記録　前原の天道さま　開村と破籠　村歩き　永遠の詩　〔補註〕

瀬戸と多治見　一二八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

土の器　陶祖と磁祖　加藤民吉の旅　古窯の匂い
岐阜　一三五
遠望　美濃のバビロン　金華山の信長　鵜飼屋にて
長良川の芭蕉　鷺山と森田草平
大垣　二五六
輪中の城下町　旅寝の果　『おくの細道』むすびの地　俳跡めぐり　幕末大垣の詩人達　閨秀詩人細香の墓
関ヶ原まで　一七七
養老物語　関ヶ原　不破の関

飛騨路

白川郷　一九一
雪の秘境　「高野聖」の道　明善寺にて　猿丸と『今昔物語』
高山　二二九
飛騨の古都　詩人夕咲　伝統と風雅　五月の高山

天生峠　二三二

伊賀路

柘植　二四五
伊賀越　横光の故郷　「蟻」の詩碑

上野　二六三
上野まで　芭蕉の故郷

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

東海文学散歩　山道篇　おぼえがき

本巻は『東海文学散歩』の海道篇上下二巻に続く山道篇として、岐阜県中津川を起点に関ヶ原不破の関までの中仙道美濃路及びそれに沿う尾張の一部、飛騨路、三重県に入って柘植から上野に至る伊賀路など、東海地方の山野部の踏査記録を収めた。第一回の踏査は海道篇と同じく昭和三十七年から翌三十八年に続いて行ったが、山道篇の執筆は昭和四十二年に一応完了した。しかし例えば建設途上にあった明治村や、大雪の中に訪れた飛騨路などは、その後の踏査を必要としたので、この山道篇はようやく本巻において完了したと云うべきである。かえりみるとその間昭和三十七年から五十三年までの約十五年の歳月が経過しているが、「文学散歩」として著者が最も意を注ぐ記録性は、文中または文末にその踏査執筆や補記の年月日を入れて遺憾なきことを期した。（著者）

東海文学散歩　山道篇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中

仙

道

中津川

恵那山麓の中仙道

木曾馬籠から左手まぢかに恵那山を仰ぎながら、旧中仙道を中津川市落合へ下る。木曾馬籠の領分も荒町の部落を過ぎて「送られつ送りつ果は木曾の秋」の芭蕉の句碑のある新茶屋で終った。そこから先はもう岐阜県中津川市の内で、眼下には木曾川恵那峡あたりが銀の棒のようにきらりと光り、東美濃恵那郡の平野が茫々とひろがりはじめる。

恵那郡の名はすでに古い。大化の改新（大化二年、六四六）によって制定されたときは恵奈郡と書かれた。恵那郡は恵奈山（恵那山）より出た名で、それがまた明治時代の恵那郡に生れ変ったわけである。

江戸からの旧中仙道は、信濃路西端の馬籠宿を過ぎると落合、中津川、大井の恵那の三宿から大（おお）

湫、細久手、御嶽（御嵩）、伏見、太田、鵜沼、加納と美濃路を通り、尾張、近江の国々を経て京都へ向っていた。そこには現在国鉄中央線が走り、国道十九号線が通じて、中仙道の旧態はほとんど失われながらも、時折ふと思い出のように里道となって姿をあらわしたりする。恵那三宿も落合は中津川と合併して中津川市になり、大井は恵那市と名を改められた。

馬籠から細々と続いた旧中仙道は新茶屋までで、その先の、昔は難所とされた十曲峠の旧道は雑木林の中に廃れ埋もれて、すでに人跡を絶っている。それに代る道は新茶屋の少し上から右へ外れて山裾をめぐりながら中央線の落合川駅に下る間道である。これは途中に大久手という部落があるので大久手道とも呼ばれる。

馬籠に藤村記念堂が建つことになって、わたくしがそこを訪れはじめた頃は、落合川駅から大久手道を辿って馬籠に入った。五キロたらずの山径に約一時間半を要したほどの険しい登り坂であった。その後になって、中津川から落合、湯舟沢を通って馬籠へ出るバスも出来たが、やはりわたくしは依然として不便で苦しい大久手道を選んだ。というのは、前にも述べたように落合川駅から登りはじめて間もなくのところに、島崎藤村が馬籠を訪れる旅人のために自ら揮毫して建てた道しるべの石が、今も忘れられたままぽつんと一つのこっているし、その上の山裾をめぐる南面した小径のほとりには、これも藤村がふるさとびとのために暑い夏の日の難渋を少しでもたすけたい念願から寄附して植え付けた鈴懸の街路樹のうち、一本だけが、今も生きながらえていたりして、そこを辿ると、昔の十曲峠の旅人の苦労もいくらか偲ばれたからである。

今日もわたくしはその大久手道を辿り、うら枯れの秋の名残りの葉をつけ痩せ細ったその鈴懸の木の前に立ち、やがて、新設の自動車道路を横切って、清水平という山畑の丘の麓の細径に朝陽をうけて孤り佇む道しるべ石を撫でた。道しるべの表には「道ゑるべ」の文字の下に馬籠の方（右）へ矢印があり、「神坂村ニ至る」と読まれる。まぎれもなく藤村の筆跡である。右側面には「昭和五年十一月建立」とある。すでにそのあたりは中津川市になっているが、市当局もこの藤村の心の沁みついた文化財にはまだ気づいていないらしく、保護されている様子もみえない。それとも中津川市にあくまでも合併しない馬籠に遠慮してのことだろうか。

落合川ダムと葉山嘉樹

藤村の道しるべ石から、落合川駅を中心とした僅かな家のたたずまいがもうその下に見え、右手の山陰には木曾川ダムの水が湖水のように碧くひろがっている。

木曾谷を過ぎて来た中央線が北から南へ走る線路の傍まで歩き着いたときは、下り坂に疲れた足の力がじいんとゆるんだ。右手に落合川駅をながめ、鉄路を横切ってその下の国道に出たわたくしは、その道を左へ歩き、小山の麓をめぐるとやがて中央線のガードを潜った。そこからまた左へゆるやかな坂道がある。それを登ると桜の木立のある見晴公園の上に出た。中央線はその下の短いトンネルを潜って落合川の鉄橋を渡り、中津川駅へ向っている。

見晴公園の位置は正しくいえば中津川市落合馬場渡地内である。落合川口から木曾川ダムを一望のうちに収めるこの公園は、落合峡と新たに名づけられた観光地の一部ともなっている。ダムを見下す公園の一角に、大正末期から昭和初期の文壇にプロレタリア作家として活躍した葉山嘉樹の文学碑が、中津川市の有志の骨折りで建立されたのは、昭和三十四年十一月であった。わたくしもその趣旨に賛同して貧者の一灯をささげた一人である。

葉山嘉樹は偶然にもわたくしと同じ福岡県の生れであった。十年前にわたくしはその郷里福岡県京都郡豊津村を訪れたこともあって、九州から遙々幾山河をへだてたこんな山国を第二の故郷として生涯を終った葉山の人生を思うにつけ、わたくしは山坂の旅に疲れた足の重たさも忘れた。

見晴公園の頂上に登り着くと、そこには菓子や飲み物を売る店とか、小ぢんまりとした旗亭があった。その旗亭の北側からだらだらと林の中の崖の遊歩道をダムの見える方へ少し下って行った西側の、落合川口の真上に当るところに出ると、その左下の崖際の少しばかりの平地に、花崗岩の切石に銅板をはめこんだ文学碑が立っている。その碑前にわたくしは立った。

馬鹿にはされるが
真実を語るもの
がもつと多くなるといい。

葉山嘉樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com